

色弱は多様性のひとつ

色彩心理学者は、まじって誕生した

色彩心理学者の金子隆芳さん。
自ら色覚異常であることを公言し、
色覚差別撤廃の活動も行なってきた。
心理学の道へ進んだ経緯と色覚差別撤廃について聞いた。

筑波大学名誉教授
金子隆芳

●かねこ・たかよし 1928年東京都生まれ。東京文理科大学卒業。ミズーリ大学大学院修士課程修了。東京教育大学（現・筑波大学）で博士号取得後、同大学で定年まで教鞭を執る。著書に『色彩の科学』（岩波新書）など。

進路を断たれて紆余曲折

——色彩心理学を学びきっかけについて教えてください。

昔から公言していることですが、私は色盲（色覚異常）なのです。旧制中学時代、進学に当たって自分は理系人間だから、進学も当然そちらに進むものとはばかり決め込んでいま

した。ところが当時は、色盲だと海軍兵学校や陸軍士官学校は言うもろか、旧制高校や大学の理科系もほとんど失格だということがわかったのです。なるほど毎年のこと、身体検査表の色神の欄には赤緑色盲と書いてあります。その意味と事の重大性がこのとき初めてわかりました。色神とは妙な言葉ですが、昔は色覚のことをこう言いました。「神」

を神経の神だと思えばよいかもしれません。

そのころ、対米戦争も逼迫して、学校どころではないというわけで、旧制中学は五年制のところ、私たちは四学年終了で繰り上げ卒業となっていました。最高学年の榮譽を担わずして中学を去ったのがいまでも残念です。そんなわけで進学のほうも、とりあえずは早く専門的な知

識を身につけて社会へ出ようと武蔵工業専門学校（現・東京都市大学）の機械科へ進学しました。本当は電気工学科に行きたかったのですが、そこでも色盲がネックとなつて機械科という選択肢しかなかったのです。

終戦はその年の夏、武蔵工専学生として勤労働員先の神奈川県相模原の陸軍造兵廠で迎えました。戦争も終わつてその秋から学校に戻り、ようやく正規の学業が始まりました。しかし敗戦という国家の大事件に当たつて、私たちも万事考え直さざるを得ませんでした。考えた結果、私も人生やり直しのつもりで、武蔵工専は退学し、翌昭和二十一年、東京高等師範学校理科一部に入学し直しました。ここでは数学専攻で、要するに「数学の教師にでもなるか」というわけです。数学が得意というのでもなかったのですが、理科系でも

数学だけは色盲でも可でした。ところがいざ入学してみると、とびきり秀才が何人もいて、彼らと一緒ににはやつていけないと思いました。師範学校は教員養成機関ですから、必須科目として教育心理学があります。これが私にとって心理学に接した初めでした。数学能力も教育心理学でいう知能指数の問題をはらんでいる。「数学もさることながら、心理学も大事だ」。私の心理学志向はこうして芽吹きました。そうなる可我慢できず（高等師範は四学年制のところ）、私は三学年修了でこれ中退し、旧制東京文理科大学の心理学専攻に転向進学することになります。

色の研究はまだです。心理学は文系ですから入試に当たって色盲云々は問いません。しかし現代心理学のありていはこのように理学的です。なぜ心理学に進んだのですかと聞かれら、色盲の理系志望者にとってはこれしか手はなかったのだと答えることにしています。それにしても心理学には実験室があるのだというのは嬉しいことでした。

このあたりで一言お断りしなくてはならないことがあります。これまでも無造作に使ってきましたが、色盲という用語は間違つた印象を与えるからという理由でいまは使いません。代わりに色弱といえます。ほかに色覚異常、色覚特性、ドルトニズムなどがあります。ここでは英語のカラー・ブラインドの直訳をあえて試用してみたものです。皆さんはどう思われますか。